

伊藤祐二（作曲家）

ユー・ジ 芹に

気をつける

① 先日、妻、井上郷子の新しいCDからの一曲をユーチューブにアップした。近藤謙の「視覚リズム法」という美しい曲だ。(https://www.youtube.com/watch?v=Rb1orM8B8U0)

アップするにあたり、元のファイルからデータ量を少しずつ減らしたファイルを複数作り、聴き比べてみた。変化に興味があった。一見、どれもきれいに聴こえるが、データ量が減ると、タッチのニュアンスがどんどん欠落してゆくのがはっきりとわかる。フレーズの、ある音で立ち止まっている時の「待ち感」、近接する音が別の文脈に属している時の「違和感」、中低音域の弱い音でハンマーが弦を打鍵した時の「フェルト感」等、そういうものがあからさまに欠落してゆく。結果、パルスとしての音がただ並ぶ。猛烈につまらない。

妻は、音楽大学で教えている。彼女曰く、今の多くの学生は、曲をユーチューブで聴いている。あるいはmp3レベルの配信で。オーディオ装置ではなく、P

Cやスマホで……。

② 講師を務めるワークショップ「未来に受け継ぐピアノ音楽の実験」で、多摩美術大学情報デザイン学科教授の久保田晃弘さんに、とても刺激的なお話しをしていただいた。久保田さんは「インターフェイス」「コード」というキーワードを駆使して、楽器、演奏、作曲等、伝統的な音楽の要素を別の視点から扱う（ハックする）。物理モデリングにより、弦の長さ、共鳴の仕方、ハンマーの硬さ、ハンマーのノイズ、調律の仕方、等々、様々な要素をコンピュータ上で自由自在に組み立てて、架空のピアノを作る。次に、コンピュータのキーボードを打って、コードをリアルタイムで書き、書き替え、そのピアノを、リアルタイムで鳴らす。（演奏する。）伝統的な音楽のスキルとは別に、違うやり方で音楽する。コードは符号である以上、音や、その他あらゆる符号化可能なものと関連付けて扱え、ネット上で共有し、変更してゆける……。

（久保田さんの著書、例えば「遙かなる他者の為のデザイン」等に詳しい。）

③ ①の件で言うなら、人が音楽を聴く耳は、すでに変わりつつあるという事。そういえば近年、和声もバスラインも変

化音もすべて無視して、高速でスポーツのように弾くピアノリストが多くなつた。そういえば、②の久保田さんも、PCの世界の素晴らしい可能性の方に、その時スピーカーから出ている音自体よりも、よりプライオリティを置いているように感じられた。

ピアノやヴァイオリンのような古い楽器よりも、コンピュータとインターネットの方が急速に変化拡大していくのは明らかだ。時と共に、テクノロジーと共に、あらゆる社会的要素と共に、人は、だから音楽は、変わってきたし、変わって行く。

④ 落合陽一の「魔法の世紀」を楽しく読んだ。でも、すべてが、コンピュータの符号・数字を扱う（素晴らしい）能力の話だ。たぐさんの例と共に、いよいよ「映像の世紀」から「魔法の世紀」へと。そして、「世界のあらゆる現象と存在」を「コンピュータ言語で記述する」という目標。

⑤ 人は、音楽は、どう変わって行くのだろう、と思う。世界を符号・数字で記述しつくす人は、人を、どのように「記述」するのだろうか。人のすべてが記述されるのだから、きっと「オメガ因子」みたいな符号も書かれるに違いないけれど。